



生活やものづくりの学びNetニュース

巻 頭 言

どうする技術・家庭科

全国家庭科教育協会（ZKK）副会長
石井克枝

今、テクノロジー科の新設が話題になっている。技術・家庭科はどうなるのだろうか。「生活やものづくりネットワーク」が2010年9月に創設され、設立の趣意には「子どもたちの人間性豊かな成長はモノや人とかかわる生活を実践することによって培われます。・・・中略・・・自立の基礎を身につけていきます。」とある。Society5.0の社会は、デジタル化が進み、生活実感がより薄くなっている。教育現場でもGIGAスクール構想のもと、ICT化が進み、児童生徒一人1台端末計画が進められた。2021年10月には文部科学省内でのデジタル化について担当してきた初等中等教育局内の情報教育・外国語教育課は発展的解消し、学校デジタル化プロジェクトチームが発足している。

テクノロジー科は（一社）日本産業技術教育学会の要望書である。現在の技術・家庭科の技術分野をテクノロジー科にと提案されている。家庭科には触れず、家庭科はどこに行く？家庭科も1教科？かと素朴な疑問が出る。現状では、技術・家庭科は技術分野と家庭分野の2つの分野で1教科としている。1教科に教員1名という教員の定数にかかわる法律がネックになり技術科か家庭科どちらか1名しか配置されない学校も多い。

2024年3月の本ネットワークの春の学習会では数校の家庭科を非常勤講師として担当している方が参加されており、教科の評価は専任の技術の先生にお任せになると話していた。

技術・家庭科履修形態や時間数は変化してきた。1980年まで男女別の内容で学んでいる。すなわち、男子は技術領域、女子は家庭領域を学んだ。1981年より男子は家庭を女子は技術を1領域ずつ学び、1993年には技術と家庭から4領域を男女ともに学び、2002年には技術分野と家庭分野を男女ともに必修になったが、授業時間が大幅に削減された。2012年からは選択としての履修もなくなっている。技術も家庭も実習を伴い学び生活に生かすことが望まれるが、現状の授業時間が不足しているのは明らかである。

最近、国際的動向としてウェルビーイングが注目されている。OECDが「PISA2015年調査国際結果報告書」において、ウェルビーイング（Well-being）を定義し、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含む概念としている。子どもたちが2030年以降も活躍するために必要な資質・能力について検討を行い、2019年5月に“Learning Compass 2030”を発表し、この中で子供たちがウェルビーイング（Well-being）を実現していくために自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性が指摘されている。この内容は家庭科で取り組んできたことに深くかかわっている。

生活やものづくりネットワークで大切にしている技術科、家庭科の学びを小中高の普通教育として継続して実現していく重要な時期だと感じる。

Contents

巻頭言	1
報告 生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会	2～4
2023年度各地区活動報告	5～7
生活やものづくりの学びネットワーク 第15回（2024年）総会資料	8～11
「2024年度 公開フォーラム」のご案内	12

報 告

生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会 「技術科と家庭科における観点別評価と学習指導の課題」

はじめに

2024年3月23日(土)、13:30～16:00、「春の学習交流会」が開催された。Zoomによるリモート開催で、約48名が参加した。テーマは『技術科と家庭科における観点別評価と学習指導の課題』で、学習指導要領のもとで、技術科と家庭科がどのような学習指導の課題を抱えているのか、指導計画と観点別評価を中心に、中学校技術科、家庭科及び高等学校家庭科の指導に関わっている3人の先生方からご報告いただき、技術科と家庭科の今日的課題を共有し、新しい時代に向けた教科学習と評価について考えようという企画である。

まず、中学校技術科の報告として井川大介先生に、中学校家庭科の報告として尾形美和子先生に、高校家庭科の報告として白川広子先生にご発表をいただいた。その後、ご発表を受けて、ブレイクアウトルームに分かれてディスカッションし、全体に戻ってグループからの報告を全体で共有し、最後に3人の発表者から質問への回答や感想をいただいた。

運営側からの反省は、ブレイクアウトルームでのディスカッションの時間を20分に設定していたが、評価の課題は参加者の皆さんの課題意識も高く、ディスカッションの時間が不足してしまっていたことである。また、「評価については、テクニカルな対応について議論しがちですが、これまでの評価の本質を議論することが大切だと思います。」「観点別評価が生徒や教員にとってより良いものになっているのかどうか。という部分に焦点を絞って、より深く議論することも必要ではないかと思います。」「現在の観点別評価は、やらされているのが実態ではないでしょうか。評価の出し方の工夫ではなく、もっと根本的な部分からの議論ができると良いと思います。」「困っている先生方も多いと思うので、第二弾を期待します」等、参加者の皆様から頂いた貴重なご意見をもとに、今後の学習会を企画していきたい。

「教育条件整備と教育課程の自主編成からの報告」

北海道遠軽町立遠軽中学校 望の岡分校 井川大介先生

1. 講演の概要

技術・家庭科の指導内容は学習指導要領に規定されているが、子どもたちの望ましい発達という観点が最優先されているから論じなければならない。国際的な技術教育のスタンダードについてはユネスコから1974年に改正勧告されている。技術科教育学者田中喜美によると、「普通教育としての技術教育の教育目的とは、技術の科学的認識や生産技能に裏打ちされた生活概念としての技術観・労働観を形成すること。」

と述べられている。わかること、できることの上に技術と労働の見方を「より適切でより豊かな生活概念」として形成することこそ普通教育として技術教育の目指すべきところである。

2. 参加者の討論で深められたこと

まず、子どもたちの実態に寄り添う井川先生の姿が教育の本来の姿であるとの意見が出された。生徒たちの実態を見ると、体験活動でやり方がわからなかったり、作ることをうまく表現できなかったりする生徒が多くみられる。そういう生徒を支援するための評価であることが大切である。観点別評価であれ従前の評価であれ、評価のやり方を変える必要はないではないか。実際に観点別に変ったが、意欲とか主体的とかで評価されることの問題をもっと考えなければならない。評価ばかりに縛られていると、本来学ぶことを楽しむ生徒の姿が失われるのではないかとということが論じられた。

次に、技術科について免許外教科教授担任の解消のため生じている問題について話し合われた。遠隔教育で免許保有者が配信授業するように国は規則を変更するといっている。経済効率にあわせて私たちがコマとなる。免許状のある人が教えれば学力向上に寄与できるからいいのだという論理で2024年度から現場で行われるのではないかと危惧されている。教育行政からの要請は、本来あるべき子どもの発達に寄与する姿と離れている。私たちは要請に反対し、よりよい姿を追求することの大切さが述べられた。

3. 討論を受けてのまとめ

参加者されている家庭科の先生より「通じるものがありました」という意見があった。評価を先行させてしまうと教育目標＝内容の設定に目が行ってしまう。そもそも、なぜそれを学ぶのか、なぜそれを教えるのかといった教育目的論が重要であることが確認できた。

被服製作（てぬぐい小物製作）の授業と評価について

小金井市立小金井第一中学校 家庭科教諭 尾形美和子

1. 発表内容について

手ぬぐい小物製作の授業とそこから見えてきた評価の課題についての発表の内容であった。ここでは、評価に関わる部分を中心に報告する。

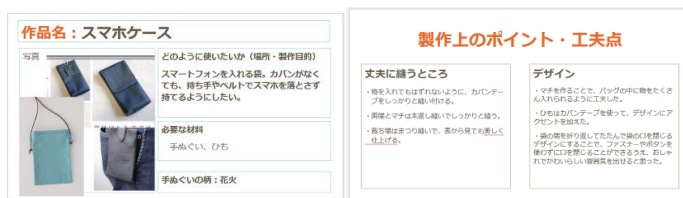
2. 授業の概要

学習のねらいは①基礎的・基本的な手縫い技術の習得（玉どめ、玉結び、ボタン付けなど）。②自分の生活を改善し、豊かにする意識を高める。（自分の生活に必要なものを作る）③製作物を長く使うための工夫（丈夫に縫う箇所）に気づかせる。である。基礎縫いの授業では、前半はプリントを使って知識の学習をする。試験をする都合上、知識の授業も必要と考える。後半が実技である。実技はクロムブックで縫い方を個人で確認して縫う方法をとっている。評価は、最後にまつり縫いテストを行い知識・技能の評価としている。ABCでどの程度できているかを評価し、評価項目は前もって提示している。さらに、実技テストの振り返りの自己評価を文章で書かせ、主体的に学習に取り組む態度を見取っている。手ぬぐい小物製作は、夏休みに計画を練り、授業では準備1時間、製作6時間、仕上げ1時間である。PCや教科書を参考に個別に進めていく。Googleスライドに毎時間写真を撮り、反省と次の予定の実習記録をつけさせ、評価の対象とした。

3. 評価について

製作物は、縫い方の基本ができているか、丈夫に縫えているかなど、知識・技能で見ているが、本授業では思考・判断・表現や主体的に取り組む態度を重視している。

思考・判断・表現については、実習記録の計画の製作物のねらいと実際が合致しているかどうか、製作上のポイントの記述ができているか、さらに実習記録の振り返り（下図）で見ている。複数回まとめて、ABCで評価している。



主体的に取り組む態度については、製作工程での記録において、上手くできたところ・工夫点や次の目標・改善点の項目への記述内容で見ている。評価について困っていることとしては、①観点別評価の3観点すべてを1:1:1で毎学期出さなければならないこと②評価上実習記録の割合が大きいが、記録に時間が取られること。言語表出の苦手な生徒が不利になること③主体的に学習に取り組む態度のつけ方として、計画と改善から見ていきたいが、製作経験が少ない見通

【表2】各時間におけるルーブリック

	評価A	評価B	評価C
1時間目 批判的思考力	提示された資料や事例をもとに、子育ての課題点について、複数の視点から問題をとらえ、社会的背景と結びつけて考えることができる。	提示された資料から、必要な情報を取り出すことができる。	自分なりの観点で、情報を書きだし、評価することができる。
2時間目 創造的思考力	それぞれの国の支援策の特徴を理解し、違いを認めつつ、日本の課題点に合うように変容して建設的に考えることができる。複数の観点から課題点をとらえ、複数の解決策を比較検討したうえで、よりよい解決策を提案できる。	他国との信念や価値観の違いを理解し、それぞれの支援策のよさを理解することができる。条件に沿って、良いと思う解決策を提案できる。	他国の支援策を理解し、尊重することができる。自分なりの観点で、何らかの解決策を見出すことができる。

しを立てること自体が難しいこと、粘り強く取り組む態度としても失敗してもどうやって克服していくかについてみたいが、時間数が限られ、負担感が強く、やり直しに前向きになれないことがある。製作の中で上手く改善し、自分の好きなものを作って自信を付けてほしいという思いで実習の時間を多くとるようにしているが、理想通りにはいかず、試行錯誤をしているところである。

評価の実際と授業実践から考える思考力とは

千葉県立幕張総合高等学校 家庭科教諭 白石広子

1. 思考力を高める授業と評価

考查では、『知識・技能』『思考・判断・表現』を評価しているが、真に『思考・判断・表現』を評価できているのか、課題を感じていた。そのため、授業プリントにおいて『思考・判断・表現』を評価できるような授業を考え実践している。今回は、保育分野において生徒の思考力をはぐくむ授業と評価について紹介する。

評価は、「概論 汎用性のある資質・能力をどう育み、そしてどのように測るのか」（『VIEW21』長谷川康代、2016）で紹介されている、「GPS-Academic」で測る力と評価の観点」を参考にした【表1】。思考力を「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」の3つに分けてルーブリックを作成し評価した。

【表1】「GPS-Academic」で測る力と評価の観点

	力の定義	評価の観点
批判的思考力	必要な情報を取り出し、色々な視点から考え、自分の考えを筋道立てて説明するための思考力	・情報を抽出し吟味する ・論理的に組み立てて表現する
協働的思考力	他者との共通点・違いを理解し、合意を得たり、気づきを得たりして人と関わりあうための思考力	・他者との共通点、違いを理解する ・社会に参画し人とかかわる
創造的思考力	情報をつないだり、別の場面に応用したりすることで、問題をつみつけ新たな解決策を生み出す思考力	・情報を関連づける・類推する ・問題を見だし、解決策を生み出す

出典：『VIEW21』長谷川康代、2016

2. 各時間におけるルーブリック評価

1時間目については、授業目標「子どもを産み育てる過程にある課題を、データをもとにさまざまな視点から捉え、問題意識を高める。」に沿って批判的思考力を基準に、2時間目については、授業目標「仕事と子育ての両立を支援し、子育てをしやすい環境にしていくためには、日本にどんな支援策や制度があったらよいか考える。」に沿って、創造的思考力を基

準に、それぞれ【表2】のようなルーブリックを作成した。

1 時間目の感想では多くの生徒が課題点を捉え問題意識をもつことができた。評価 A の生徒はさらに社会的背景と結びつけて考えることができた【表3】。

【表3】評価 A の生徒の感想

◎A 少子化を防ぐためには、子供を増やすしかないのに保育園に入れないと意味がないと思う。国がもっと国民の気持ちになって考えて対策を私たちにわかりやすい形で示してほしいと思った。子どもを産むと金銭面だけではなく精神的、体力的にも負担がかかるし、親だけではどうしようもないことも多くあるので、周りにいる人と助け合っている育児が一番楽しそうだなと思った。妻1人に負担がいかないようにまずは、心たいて支えあうことが良いと思う。

2時間目の感想では、子育て支援について個人の問題として捉えるのではなく、社会とのつながりの中で、複数の視点から多角的に思考し、解決策を見出した生徒については評価 A とした。評価 A の生徒の記述を見てみると、スウェーデンと

の大きな差を指摘した上で、日本の状況を捉えて支援策を提案したり、企業側の視点に立った、税金や国家の在り方にまで思考を広げている。

3. 授業のまとめと今後の課題

本授業では、具体的な支援策を考える中で、財源の確保、子育て支援を実現させる難しさ、制度設計の重要性など踏み込んだ記述内容が多数見られ、批判的思考力については、さまざまな視点から子育て支援の重要性を捉えることができた。

今回の授業では3つの思考力のうち「協働的思考力」に該当する学習活動が十分ではなかった。この項目を評価するには、日本と各国の支援策の比較や、自分と他者の考えの違いや共通点を深く理解した上で、気づきを得るといった過程が必要である。

今後も授業改善を続け、生徒のよりよい学びにつなげたい。

事務局からのお知らせ

1. 年会費の納入をお願いします。

2024年度の請求を宛名用紙の裏面に記載しております。9月30日までに納入をお願いいたします。

2. 学習交流会等への活動補助費を支給しております。

本ネットワークでは、各都道府県での学習交流会・講演会・勉強会等の活動を支援しております。

本年度も例年どおり活動補助費（1万円）を支給しております。希望される場合は事務局までお申し出ください。

3. メーリングリスト（ML）にメールアドレスを登録し、情報発信・交換等に活用ください。

MLを活用して、迅速な情報配信や交流をはかりたいと考えております。多くの皆様の登録・活用をお願いいたします。総会や学習交流会、各関連団体からの研修会等のご案内や会員同士の意見交換等並びに事務局からの連絡を行っています。ぜひご登録をお願いいたします。またMLに登録することで各種情報を添付ファイルをつけて配信することができます。情報の配信に不慣れな場合は、事務局にお知らせいただければ事務局から配信いたします。

MLへのメールアドレス登録及び変更は、事務局（seikatsu_nt@yahoo.co.jp）までお願いいたします。

MLアドレス：seikatsunetmail-ml.seikatsunet.com@ml.seikatsunet.com

4. 新版ビジュアルパンフレット（2019年4月版）を活用ください

新版ビジュアルパンフレットは、新学習指導要領への対応及び資料を更新するなど大幅な改定を行い、内容を充実させています。家庭科、技術・家庭科の学びの重要性を理解していただく資料として、すでに大学の授業や研究会、情宣活動等に活用いただいております。

パンフレットがご入用な方は事務局までご連絡ください。

・パンフレット代：無償

・送料：会員拡大用に使用する際は無料

大学等の授業で活用される場合は30部迄は無料、31部以上の場合は着払で送料をご負担いただきます。

なお、HPにパンフレットのデータが掲載されています。ご自由に印刷してお使いください。

5. ニュースレター送付先住所の変更について

勤務先の異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所をお願いします。

6. 退会届の提出について

退会される場合は「退会届」の提出をお願いしております。ホームページに「退会届」の書式が掲載されておりますので、ご記入の上、メール添付か事務局への郵送でご提出ください。なお、年度ごとの退会となりますので、年会費をお納めの上、退会をお願いします。

事務局メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp

ホームページ URL：http://seikatsunet.g3.xrea.com/

1. 長野県の活動報告

2023(R5)年度は 2024 年 3 月 16 日(土)信州大学教育学部に
て、信州大学の福田が「かぎ編針を用いた製編（あみもの）
Happy Crocheting」というテーマで研修会を開催しました。
家庭科やものづくりに関心を持ち多様な背景を持つ県外特別
支援学校高等部教諭 1 名、県立高校教諭 2 名、高等専修学校
教諭 2 名、（北信地区 3 名、中信地区 1 名）学生 1 名の合計 6
名が対面で集まりました。

製編（あみもの）に用いる糸の種類、針の種類、編手の張
力による編地の地合の違い、増やし目と減らし目と立体の関
係、かぎ針編と棒針編、長方形と円形の基本の編み方、円錐
形と円柱形の編み方の原理等の製編（あみもの）の理論的な
特性を理解するとともに、糸についての関心や理解が深まり、
各自が作品デザインの構想を行い、製作の見通しを持つとと
もに製作意欲を高めることができたものと期待します。今回
は、中心から円を作り、円柱形と円錐形の全て片面を見なが
らの細編みで 2 つのパーツを制作し、はぎ合わせる方法を選定
しました。参加者が自由に糸（色・組成・太さ）と針（太さ）
を選び【きのこ】を制作しました。時間内には、中々完成ま
でたどり着けなかったのも、各自最後は自宅で自主制作とな
りました。

まさに家庭科の中でも領域横断型の教材研究や指導展開に
拡張されるものに結びついた教材が益々求められるところタ
イムリーなヒントになる学習交流会となったものと考えます。
デザイン構想工程と製編工程を行いました。全く異なる素晴
らしい個性的な作品が完成しました。参加者相互に作品を見
合うことも大きな刺激となり、和気あいあいとした魅力的な
楽しい教材研究のひとつとなったのではないかと思います。
準備していた県産の林檎と梅の木（本物）の土台も提供でき
て良かったです。

参加者からは、「かぎ針で立体を編むのは初めてでしたが楽
しかった。このような研修に参加すると生徒の気持ちになり、
もっと優しくしなければと思い反省。大変勉強になり、焦り
ながらも楽しく参加できた。予習講義・実習・復習講義は実
感を帯びることができてとても良かった。来年度の製作実習
や課題研究に取り入れたい。製作や活動の幅が広がるヒント
をいただき、有難い研修会。太めの毛糸を編むことが多かつ
たので、かなり苦戦してしまっ。編物の貴重なお話も伺え
て良かった。」などの感想が寄せられました。STEAM 教育や
家庭科内領域横断プログラム開発等にも生かしていただける
ものと期待しています。研修会の機会を与えて下さった本会
に感謝申し上げます。

<作品集>



▲妖精の森の魔法きのこ



▲無題

（文責：福田典子）

2. 千葉県の活動報告

1. 日程 2024 年 3 月 27 日（水）
2. テーマ「災害時の食－災害時の準備と支援を考える－」
3. 講師 石井克枝（千葉大学名誉教授）

生活やものづくりの学びネットワーク千葉では、第 11 回学
習交流会を久々の対面での実習を取り入れ千葉大学で開催し
ました。年明けの能登半島地震や千葉でのスロースリップに
よる地震の多発を受け、「災害時の食－災害時の準備と支援を
考える－」をテーマとしました。静岡や山形からの会員や大
学生を含めて 18 名の参加を得ました。

（1）能登半島地震被害地における NPO 法人キャンパーによる炊き出し支援報告

「NPO Camper」（非営利活動法人）は、キャンプで培った
野外調理の技術で災害時の炊き出し活動を目的に 2005 年に
立ち上げました。東日本大震災・熊本地震等ではトイレや宿
泊用トレーラーなども用意し、炊き出し支援を行なっていま
す。炊き出しの献立や調理に関しては、日本調理科学会と共
同研究をして、おいしく栄養バランスの良い献立と作業手順
をわかりやすく示した「災害時炊き出しマニュアル」を作成
しています。「①基本のメニューはまずは心理面・衛生面・調
理面を考えて、栄養面は最後に。②地方の食文化を意識。③
調理時間は 2 時間以内に。」をシステム化してメニューを作成
しています。

このようなマニュアルをもって、1/17～3/22 まで、能登町
の石川県立能登高校を拠点に富山大生や九州の中村学園大生
のボランティアも参画して高校への昼食から始まり近隣の避
難所、役場や消防署等にも広げて、65 日間約 13,200 食の炊
き出し活動を行いました。

(2) 帰省中に七尾市で被災した室矢さん（千葉大2年）のお話

<地震発生時から避難所～知人宅～自宅へ>

地震発生時は外出先から帰宅したばかりで自宅1階で被災。激しい揺れ、家中の様々なものが落ちてぶつかる激しい音がした。家具などの耐震はあまりしていなかった。避難場所は家族全員知っており、地震直後すぐに避難所へ徒歩で向かった。避難所が必ずしも安心できる場所ではないと感じ1日の夜のうちに知人宅へ移動し、3日に自宅に戻った。

<被害状況>

道路は液状化状態。JR 七尾線の線路はぐにゃりと曲がる。倒壊した家屋も多く、被害を受けた家屋（全壊・半壊等）は1万棟を超す。断水は約14200軒に。

<1月3日の食事と救援物資>

正月で買いだめしていたものが役に立った。断水のため水はドラッグストアやスーパーで購入、電気やガスは使えた。この日のメニューはカップ麺、冷凍炒飯（紙皿にラップを敷いて利用）、冷凍餃子スープ（ねぎをはさみでカット）だった。4日には七尾市役所に全国から救援物資が届くも物資配布の人手不足で役所に取りにいかねばならなかった。

<水の問題>

避難所設置トイレは衛生状況がかなり悪い。飲料水は配給されているがトイレの回数を減らすために水分を採らないようにしている人もいた。

<情報の問題>

被災地ではフェイク情報が拡散し、正しい情報をいかに集めるか等情報収集は極めて重要なことである。役立ったものとして「七尾市公式LINE」がある。七尾市役所の様々な部署から多くの情報（給水、食料・物資配給、ガソリンスタンド、ゴミ等）について配信され、今回の地震を機に登録した人も多かった。

(3) 災害時の食をつくる（実習）

災害時の備蓄として飲料と調理用で一人1日1ℓと提案されています。今回は一人400mlとして計算。一班で使用できる量として2ℓのペットボトルを配布。災害時の食では安全面から火を通したものを使うことが大事で、全て加熱調理メニューとなっています。食材は災害時でも比較的手に入りやすい根菜、缶詰、乾物を使用。

①全員が一人1個の味噌玉づくり ②パッククッキング（米、人参、大根それぞれを高密度ポリ袋に入れて1つの鍋で調理）③大根の煮物 ④人参のツナサラダ ⑤じゃがいもとベーコンの炒め物 ⑥鰯のかば焼き混ぜご飯を5班（②～⑥を分担調理）に分かれて実習を行いました。各自ラップを敷いた皿に出来上がり載せ、味噌玉にお湯を注いで作ったみそ汁とで試食。各担当グループが感想発表し、石井先生から講評を受けました。

(4) 感想抜粋

- ・家庭科の調理実習で培った力が自分の生活だけではなく、地域や長い人生の中で役に立つ、生きた学びになることを感じる学習交流会でした。
- ・水1本で考えて調理することやゴミの問題、調理時間など考えながら調理するのも授業に取り入れてみたいと思いました。
- ・災害時の食について、実際に炊き出し活動しているボランティアを紹介してもらいながら学ぶことができてとてもいい勉強になりました。自分自身どこか他人事であったが家の備蓄品など不十分な部分があるので見直したいという気持ちになりました。
- ・学生の方から被災した話をきき改めて身近に感じました。大変な中でもしっかり記憶して私たちに伝えてくれたことに感謝です。
- ・災害時の「水」の重要性を室矢さんの話を聞いて認識しました。各班2ℓの水をどう使うか、全てをこれでまかなうとしたらと難しい問題だと感じました。
- ・災害時の食材として根菜を使うことを知りとても参考になりました。災害時のメニューを沢山知ると同時に実際に作ってみることを授業に取り入れたいと思いました。
- ・実習でつくったものはとてもおいしかった。味噌玉は毎日の弁当などでも活用できると思いました。
- ・今日の災害食はおいしく、家にあるもので災害時に備えることの大切さを改めて実感しました。



災害食実習



炊き出し支援の報告

（文責 小谷教子）

3. 東京都の活動報告

2023年度は5月から新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類になったことで、本実行委員会の活動はコロナ禍の状況に戻った。実行委員会はオンラインで10回開催した。活動は、江戸川区小学校すくすくスクール（児童館と学童クラブの機能を兼ね備えたような放課後児童育成施設）2か所で8月に縫い物、12月に編み物講座を開催した。また、3月には昨年度好評であった小中高校教員対象の実技講習会を題材を変えて開催した。

その際に活動補助費を有効に利用させていただいた。お礼を申し上げるとともに今後も継続した支援をお願いしたい。以下概要を記す。

A 活動報告

I 児童対象の活動（縫い物、編み物講座の開催）

1 中小岩小学校すくすくスクールでの活動

- 2023年8月24日（木）11:00～16:30
 - ・内容―「ファスナー付きペンケース」作りの指導
 - ・参加者―3年 女子4名、男子5名、4年 女子5名
5年 女子4名、6年 男子1名 計19名
 - ・講師―東京実行委員5名、大学生4名 計9名
- 2023年12月27日（水）11:00～16:30
 - ・内容―編み物で「手編みのマスコット すみっこぐらし」作りの指導
 - ・参加者―3年 女子11名、男子1名、4年 女子3名
5年 女子1名 計16名
 - ・講師―東京実行委員6名、会員1名、大学生4名 計11名

2 西小岩小学校すくすくスクールでの活動

- 2023年8月25日（金）11:00～16:30
 - ・内容―「ファスナー付きペンケース」作りの指導
 - ・参加者―4年 女子14名、男子2名、5年 女子4名、男子1名、6年 女子1名 計22名
 - ・講師―東京実行委員7名、会員1名 計8名
- 2023年12月26日（火）11:00～16:30
 - ・内容―編み物で「手編みのマスコット すみっこぐらし」作りの指導
 - ・参加者―3年 女子13名、男子1名、4年 女子2名
計16名
 - ・講師―東京実行委員5名、会員1名、ボランティア1名、
大学生4名 計11名

3 成果と課題

- ・どの回においても参加児童は一生懸命製作をし、ものづくりの楽しさを感じるとともに丁寧な指導に満足していた。児童は「自分の意志で参加していた」ものが大部分であった。編み物はかなりハードルの高い内容であったが、約2時間で全員仕上げた。
- ・縫い物の題材の「ファスナー付きペンケース」は、出来上がった後の使い道としては、児童に喜ばれるものであったが、家庭科を学んでいない3、4年生に対しては技術上難しいものであった。学習段階に応じた題材設定の必要性を感じた。
- ・講師陣については、実行委員と公募の会員だけでなく、教職課程の大学生のボランティアの参加があり、大変ありがたかった。編み物については、初心者が多いため、児童1～2名につき講師1名という指導体制が組めたが、講師陣の人数が増えたことで、児童にとっても丁寧な指導ができた。今後もこのような関わりを続けていきたい。
- ・家庭科を学習していない小学4年生以下でも興味・関心・意欲があれば、製作できるとの思いを強くした。
- ・課題は、児童のニーズや興味にあった教材の開発と多様な

児童に対する指導法の研究である。

II 小中高校家庭科教員対象の活動

1 実技講習会の開催

- ・日時：2024年3月28日（木）9:00～12:30 終了後 14:00
まで、地下学生ホールで、参加者同士の交流可
- ・会場：愛国学園短期大学 被服学実習室 学生ホール
- ・内容：衣生活領域の刺し子の作品製作と指導法
- ・製作品：刺し子の巾着袋（木綿生地）
- ・講師：木林祥子氏（愛国学園短期大学非常勤講師・銀座亜紀枝主宰刺子学園師範）
- ・参加費：1,000円

2 講習会の提案のポイント

- ・近代刺し子作家銀座亜紀枝氏の刺し子の技法を学ぶ。
- ・洗うと消える方眼プリント布を使用して一針刺しの技法を学ぶ。
- ・方眼ガイドを活用し、多くの古典柄からオリジナルの創作柄まで、応用・発展することができ、児童・生徒の関心、意欲、創造性を育むことができる。
- ・学んだ技法は、方眼プリント布以外でもチェック柄やドット柄の布を利用して刺すことができる。

3 成果と課題

- ・参加者は、教員が小学校4名、中学校3名、高等学校8名、短大1名、教職希望学生1名、家庭科教科書出版社、手芸指導者が8名の計25名であった。多校種の教員、刺し子に関心のある方の幅広い参加があった。
- ・この講習会を知ったきっかけとしては、「ネットワークのメルマガ、ホームページ」および「家庭科の教員又は同僚から」が6名で最も多く、「実行委員長から」が4名で次に多かった。
- ・日本文化の継承に繋がる刺し子は、奥深く、芸術的である、という感想があった。

B 課題

- 1 「生活やものづくりの学びネットワーク」の活動目的の中に児童を通した保護者への家庭科教育のPRがある。それをどのようにして行うかを考える。
- 2 現任教員の要望を組み入れた研修と情報交換の場をいかにして提供し、家庭科教育の充実・発展につなげていくかを考える。



ファスナー付きペンケース



刺し子の巾着袋

（文責 愛国学園短期大学 亀井佑子）

【報告事項】

I 2023年度活動報告（2023年4月1日～2024年3月31日）

1. ネットワーク参加人員数

2024年3月31日現在 個人会員 277名 団体会員 17団体

2. 交流会の開催

公開フォーラム

日時：2023年9月30日（土）13：30～16：00 Zoomによるオンライン開催

テーマ： 家庭科教師のための金融教育ワークショップ ―実践と体験を通じた教育方法の紹介―

講師： 盛永 裕介 氏（JAMACADEMY 学長・金融教育プランナー）

コーディネーター： 鎌田 浩子 氏（北海道教育大学釧路校）

春の学習交流会

日時：2024年3月23日（土）13：30～16：00

Zoomによるオンライン開催

テーマ：技術科と家庭科における観点別評価と学習指導の課題

シンポジウム

・中学校技術科から 井川 大介 先生 北海道遠軽町立遠軽中学校望の岡分校

テーマ「教育条件整備と教育課程の自主編成からの視点」

・中学校家庭科から 尾形 美和子 先生 東京都小金井市立小金井第一中学校

テーマ「被服製作（手ぬぐい小物製作）の授業と評価について」

・高校家庭科から 白石 広子 先生 千葉県立幕張総合高等学校

テーマ「評価の実際と授業実践から考える思考力とは」

グループディスカッション

・司会 大矢 英世 氏（NPO 法人家庭科教育研究者連盟）

3. ロビー活動

2024年度の活動に向けて検討。

4. 会員の交流および宣伝活動

- ① ニュース発行 第25号（2023年8月）、第26号（2024年3月）が発行された。
- ② 新型コロナウイルスが感染症法上の5類に移行され活動が行われた3都県はすべて対面で実施された。
- ③ メーリングリスト上での情報発信や意見交換が行われた。
- ④ ホームページを適宜管理した。

5. 各会議の開催

(1) 総会 書面審議とし、異議なく承認された。

総会資料は「生活やものづくりの学びNet ニュース」25号（2023年8月発行）に掲載

内容 ・2022年度活動報告

・2022年度決算報告

・2023年度活動方針

・2023年度予算案

・2023年度運営体制

(2) 実行委員会

長野県、千葉県、東京都の学習交流会実施について、「生活やものづくりの学びNet ニュース」25号の掲載で報告

(3) 世話人会

- 第1回 2023年6月12日(月)～6月30日(金) メール会議
第2回 2023年7月15日(土) 10:00～11:40 zoom
第3回 2023年9月14日(木) 17:00～18:40 zoom
第4回 2023年11月23日(木) 10:30～12:00 zoom
第5回 2024年2月11日(日) 13:00～14:30 zoom

II 2023年度 決算報告 (2023.4.1～2024.3.31)

生活やものづくりの学びネットワーク 2023年度決算報告 (2023.4.1～2024.3.31)

収入の部			(単位:円)
科目	予算	決算	備考
2022年度繰越金	1,093,875	1,093,875	
個人会員年会費	250,000	243,000	延べ243人(19年1件、20年6件、21年16件、22年34件、23年154件、24年16件、25年以降16件)
団体会員年会費	140,000	155,000	1口5000円、なるべく2口以上、延べ19団体(23年17件、24年2件)
寄付	50,000	38,000	4件
雑収入	0	0	
利息	10	11	
計	1,533,885	1,529,886	

※個人会員277名 団体会員17団体(2024.3.31現在)

支出の部			(単位:円)
科目	予算	決算	備考
印刷代	130,000	87,373	ニュースレター(2回)
送料	100,000	81,900	ニュースレター発送、資料・パンフレット等の発送代
事務用品	5,000	0	
活動費	60,000	30,000	地区活動補助
HP・ML管理費	40,000	25,424	HP更新、ML管理(メールサーバー使用料、ドメイン更新料)
会議費	3,000	0	
イベント運営費	100,000	60,495	フォーラム・春の学習交流会の講師謝礼
事務局・アルバイト謝金	105,000	105,000	会計、会費管理、名簿管理等
日本家庭科教育学会事務局使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	970,885	0	
小計	1,533,885	410,192	
次年度繰越金(残高)	0	1,119,694	
計	1,533,885	1,529,886	

監査の結果相違ありません

2024年4月30日

会計監査 上村 協子
会計監査 新井 映子

印
印

【審議事項】

I 2024年度活動方針 (2024.4.1～2025.3.31)

1. 生活やものづくりに必要な学びの意義について広く討論をすすめる

- ① 学校や教育課程の在り方を含めて、生活やものづくりの学びについて、意見交換や学習会等を開く。

② マスメディアなどを通して活動を広報する。

2. 生活やものづくりのための授業・実践活動を充実させ、交流する。

① 各県の授業・実践活動を中心とした学習交流会を開催する。

② 授業・実践活動交流会は、保護者や地域の人々の協力を得るように努める。

③ 授業・実践活動交流会などの小集会には、補助金1万円を支給する。

3. 啓発・宣伝および会員の拡大をする

① 学習指導要領の改訂や新しい教育動向を反映させた新版のビジュアルパンフレット(2019年4月版)等を活用し、生活やものづくりの学びの意義を広くアピールするとともに、勧誘(改訂版)リーフレットを用いて会員を増やす。

② HPを充実させ、本ネットワークの意義と活動を知らせていく。

4. 会員相互の交流を活発に行う

① ニュースレターを年1・2回発行する。

② メーリングリストやHPを活用し、会員相互の活発な情報交換の場とする。

5. ロビー活動を行う

① 世話人会と事務局はロビー活動を推進する。

中央教育審議会委員や関係部署に、家庭科、技術・家庭科の充実に関する要望書を送付するほか、面談の機会を持つようにする。

② 各実行委員・会員は、ロビー活動を行い、状況を把握し、会員に情報を伝達する。

II 2024年度 予算案 (2024.4.1~2025.3.31)

生活やものづくりの学びネットワーク 2024年度予算案 (2024.4.1~2025.3.31)

収入 (単位:円)

科目	決算(2023)	予算(2024)	備考
前年度繰越	1,093,875	1,119,694	
個人年会費	243,000	240,000	1口1000円×(延べ240人)
団体年会費	155,000	130,000	1口5000円、なるべく2口以上(延べ17団体)
寄付	38,000	20,000	
雑収入	0	0	
利息	11	10	
合計	1,529,886	1,509,704	

支出 (単位:円)

科目	決算(2023)	予算(2024)	備考
印刷代	87,373	130,000	ニュース(2回発行)、資料コピー、リーフレット増刷
送料	81,900	100,000	ニュース、資料等の発送代
事務用品	0	5,000	封筒、ラベル
活動費	30,000	60,000	ロビー活動、小集会・学習交流会地区活動補助
HP・ML管理費	25,424	40,000	HP更新、ドメイン・メールサーバー使用料
会議費	0	2,000	世話人会・実行委員会の会議費
イベント運営費	60,495	100,000	講演料、会場費等
事務局員及びアルバイ ト謝金	105,000	105,000	会計、名簿管理、発送作業等
日本家庭科教育学会事 務所使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	0	947,704	
次年度繰越金	1,119,694	0	
合計	1,529,886	1,509,704	

II 2024 年度 運営体制

<◎世話人代表 ○世話人副代表>

	2023. 9～2024. 9	2024. 9～2025. 9	
世話人	◎鈴木 明子	◎鈴木 明子	日本家庭科教育学会
	○石井 克枝	○石井 克枝	全国家庭科教育協会
	○鈴木 賢治	○鈴木 賢治	産業教育研究連盟
	後藤 直	後藤 直	産業教育研究連盟
	大矢 英世	大矢 英世	家庭科教育研究者連盟
	川端 博子	森田 美佐	(一社)日本家政学会
	木村 範子	木村 範子	(一社)日本家政学会家政教育部会
	小田 奈緒美	小田 奈緒美	日本消費者教育学会
	若月 温美	石島 恵美子	日本家庭科教育学会関東地区会
	渡瀬 典子	未定 (8 月 1 日時点)	(一社)日本家政学会生活経営学部会
	小西 史子	小西 史子	(一社)日本調理科学会
	土屋 善和	土屋 善和	日本家庭科教育学会
会計監査	上村 協子 新井 映子	新井 映子 丸田 直美	
実行委員	各県、正・副 2 名を基本とする		★任期は例会から総会まで (例年 9 月の第 4 日曜日) としています。
事務局	浅井 直美 小谷 教子 坪内 恭子 渡邊 彩子	浅井 直美 小谷 教子 坪内 恭子 高橋 礼子	

総会について

※総会につきましては、今号の掲載をもって書面審査とさせていただきます。別紙で要望書 (世話人会案) を提案しております。その内容も併せて、ご意見等がありましたら、9 月 14 日 (土) までに事務局にメールでご一報ください。ご意見がない場合は、ご承認いただいたものとみなします。なにとぞよろしくお願いいたします。

会員継続のお願いと新規入会のお誘い

★本会は、2010 年の設立以来、多くの会員の方々に支えていただき、有意義な活動を継続してまいりました。これからも、このネットワークの主旨を改めて共有しつつ、時代に添ったあり方を問うていきたいと思ひます。皆様のお力添えをいただきながら、新たな生活やものづくりの学びの意義と実践の成果を発信・共有してまいります。どうぞ会員の皆様の引き続きのご協力をいただきますとともに、関係の学協会、個人会員の方々にお声掛けをいただき、多様な組織の会員によって構成されている本ネットワークの意義をお伝えいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

★今、学校教育に求められるものが変わりつつあります。家庭、地域社会、行政、企業と連携しつつ、大勢に流されることなく、家庭科、技術・家庭科の本質を追究し発信していくことが求められています。家庭科、技術・家庭科の魅力を共有できるこのネットワークの場の存在を、会員の皆様の個々の活動の中でお知らせいただき、つながりを広げていきませんか？入会届やリーフレット・パンフレット等はホームページからダウンロードできます。広く入会をお勧めくださるようお願いいたします。

世話人代表 鈴木 明子

生活やものづくりの学びネットワーク
公開フォーラム



学校と地域との連携にみる生活体験、ものづくり体験の
学習効果と課題

日時：2024年9月28日(土)13:30～16:00

オンライン(zoom)による遠隔開催 ※参加費無料

学校の抱える課題が多様化かつ複雑化する中、学校だけではなく地域や社会全体で子どもたちの成長を支え、見守る必要がある。学習指導要領(2017・2018)では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、地域と連携・協働しながら将来を担う子どもたちに必要な資質・能力を育成する「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されている。子どもたちや地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を達成するためのカリキュラム・マネジメントを構想、実現していくためにも、教師自身が地域連携活動の意義について体験を通して考えることが求められている。学校が抱える様々な課題に前向きに取り組んでいく学校文化を、関係者が共に構築する意識をもって教育活動の推進に協力していくために我々ができることについて、教員養成大学で学生とともに活動を行っている木村氏、佐藤氏とともに考える場としたい。

< シンポジスト >

木村 彰孝氏 (広島大学)

テーマ「中学校技術科と木育における地域との連携を考える」

佐藤 ゆかり氏 (上越教育大学)

テーマ「教員養成と地域連携を考える-雁木町家を活用した地域連携活動-」

☆☆☆ コーディネーター 鈴木 明子氏 (広島大学) ☆☆☆

申し込み方法

参加を希望される方は9月13日(金)までに事務局のWeb サイトからお申し込み下さい。
→<https://forms.gle/F7mhU3w7Uu24n9zc6>
または、右のQR コードからお申し込み下さい。
参加方法は、申し込まれた方にご後日お知らせいたします。



お問い合わせ

生活やものづくりの学びネットワーク事務局
E-mail seikatsu_nt@yahoo.co.jp
Web サイト <http://seikatsunet.g3.xrea.com>